

理学系研究科長退任 にあたって

研究科長・学部長 山本 正幸（生物化学専攻 教授）



研究科長・学部長としての2年間、小さな問題は小刻みに出てきたものの、幸い理学系研究科には世間を騒がすほどの事件もなく、無事退任できることに安堵している。さまざまな面でサポートをいただいた教職員の皆様には心より感謝申し上げたい。研究科内各委員会・各室はそれぞれ強い責任感をもって任務を果たして下さり、全学の手本とほめられた活動がいくつもあった。また教員・大学院生の研究活動は当然のことながら活発で、科研費の獲得も順調であり、それにとまって配分される間接経費が研究科運営の潤滑油として大きな助けになっているのもありがたい状況であった。

研究科長になって驚いたのは掌握しなくてはならない事柄の多さである。理学部内のことに加えて、全学から回ってくる仕事もあり、特に初年度は入試実施委員長を担当したため、相当の忙しさであった。この2年間、週日には会議・会合を平均して3つくらいずつこなしていた計算になる。

当然ながらそのような状態では物事への対応、判断が瞬時で皮相なものにならざるを得ない。これではいけないと思い

つつも、常に秒読み将棋を指し続けている心境であった。自己の研究では、なぜこんな不思議な実験結果がでるのかと思ってから合理的な説明に到達するまで15年かかったというような経験をし、またそのような研究が許されるのが理学部であると信じているが、こと運営面では大学から余裕がどんどん失われているように感じさせられた。

何事からも自由に研究を推進できる環境を守り、優秀な後継者の育成を図ることが、理学系研究科の果たすべき究極的な社会的責任だという考えを基軸に、諸問題に対応してきたつもりである。しかし、法人化後の大学の変貌の中では、しばしばこの立ち位置の難しさを思い知らされた。ひとは本来いろいろな価値観を統合して行動してきたはずなのが、現代社会では経済的効用という一次元の座標でほとんどあらゆるものごと、さらには人間の価値までもが量られるようになってきている。この単純化された価値観は国立大学法人をも覆い尽くそうと始めているようである。

私学では経営のトップである理事長と教育の最高責任者である学長の利害の対立がしばしば報じられたりするが、

法人化後の東京大学では一人の総長が両者を兼ねた存在である。そのため、中期目標などにまとめられる大学の方針は、不可避免的に、アカデミズムの座標軸と経営面の座標軸に折り合いを付けたものにならざるを得ない。アカデミズムの象徴としての東大総長の卒業式での式辞が世間に感銘を与えた時代は過ぎて久しいのかもしれないが、理学部や文学部など、実利を離れて自然や人間の真理を探求する部局にとっては、アカデミズムの座標軸が浸食されていくことは、大学が緩やかな死に向かって歩き出していることと同義だと言ってもよいだろう。幸い、研究科長となって初めて詳しく知り得た他部局の基本姿勢には、大学人の多くはまだアカデミズムの座標軸を失っていないことが読みとれる。しかし、水面下では現実的の大学経営論がアカデミズムとせめぎ合い、凌駕しようとしているのが今日の東京大学の姿であるようだ。

何を受け入れ、何を排除していくか、これからの理学系研究科の運営には難儀な行く手が待ち構えているのかもしれないが、世代交代の進む次期執行部のもと、ぜひ健全な発展がもたらされることを願ってやみません。